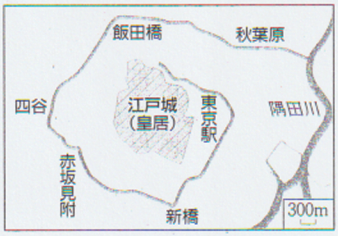
水質浄化 再活用へ

水都 東京ものがたり 5

外濠

東京の真ん中で豊かに水をたたえる皇居のお濠。江戸時代には城下町を外濠が囲み、舟運、治水、防衛の役目を担い、「水都」の象徴だった。昭和期以降、外濠の一部は埋め立てられ、水面は道路に隠されて、都民とは縁遠い存在に。近年になり、外濠の価値を再評価し、活用を目指す動きが進んでいる。

都心の空が水面に映える外濠（千代田区で）



江戸の城下町を囲む外濠

外濠を眼下に望む新宿・神楽坂で1・3年続く老舗草履屋「助六」の3代目、石井要吉さん(74)は外濠についてこう語る。「一言でいえば、近いのに遠い」

幼少期を思い起こせば、水辺で魚やホタルを捕まえ、土手の急斜面を自転車で走って遊んだ。線路と濠があるので、親からは危険だと注意された。「でもね、禁止されると余計に遊ぶのが楽しくなるんだ」と笑う。しかし、年月がたつと、土手は安全確保のため、立ち入り禁止となり、今や雑草が生い茂る荒れた姿となってしまった。

外濠　1636年に開削された。江戸城そばを起点に「の」の字形を描いて、赤坂、四谷、市谷、飯田橋を通り、神田川と合流する。最終的に隅田川につながるまでの全長は14キロほど。皇居近くにあるのは内濠。

外濠の再活用を目指して活動する学生たち（昨年12月28日、千代田区で）＝川口正峰撮影

四ツ谷―飯田橋駅 整備目指す

なぜ、外濠は近現代史の片隅に追いやられたのか？

「東京の発展とともに都合よく利用されてしまった」。そう語るのは江戸都市史研究家の後藤宏樹さん(61)。内濠や外濠は、石や材木といった建設資材を運ぶ水路として開削された。江戸を洪水から守るため、人工的に造られた神田川、日本橋川も外濠の一部だ。

しかし、東京の近代化とともに、外濠は「お役ご免」となってしまった。明治期に開通した鉄道の線路（現在の四ツ谷―飯田橋駅間）は、外濠の一部を埋め立てて造られ、現在もJR中央・総武線が走る。戦後はがれき処理のため、四谷の真田濠も埋め立てられ、上智大のグラウンドに姿を変えた。首都高速道路は、神田川や日本橋川の上を通り、川面は日の目を見なくなった。

◇

そんな外濠に焦点を当て、再活用する動きが進んでいる。石井さんを含む周辺住民や大学、企業で2013年に結成された「外濠市民塾」は、36年の外濠開削400年に向けて、外濠の活性化を目指している。目標とするのは、JR四ツ谷―飯田橋駅間に広がる市ヶ谷濠、新見附濠、牛込濠、飯田濠の約2・2キロ区間の整備だ。

この一帯は、カフェや釣り堀など一部を除いて、立ち入りが禁じられている。市民塾が思い描く外濠では、ボートレースが開かれ、子どもが魚の見える水の中で遊び、水辺ではカップルがひなたぼっこする――。人と外濠との距離がぐっと縮まっている。

◇

大きな課題は水質の浄化だ。外濠は外部の水源とつながっていないため、水はよどんでいる。市民塾は19年9月、メンバーである法政大総長、東京理科大学長、中央大学長の連名で、玉川上水を経由して多摩川の水を外濠に流し、水質浄化を図るよう都に提言。都はこれを受け、30年代の水質浄化を目指し、調査を進める。

「これまでは文化財であるという理由で行政が外濠に手を付けられなかった。民間からの要望により、行政の姿勢に変化が生じた」。市民塾事務局長で、法政大デザイン工学部の福井恒明教授(52)はその意義を語る。

若手も未来に向けて動き始めている。年の瀬の昨年12月28日、市民塾の学生たちが外濠公園に集まり、水辺を眺めて談笑していた。土手の手すりに小さなテーブルを引っかけてお茶を飲む。「外濠を見ながら飲食するための第一歩」と学生たちが考案した。

親水空間を研究する東京工業大大学院1年鈴木真さん(23)は「外濠の活用にはまだまだ時間がかかる。楽しみ方を模索し、どうすれば価値を積み上げられるか考えるのが僕らの役目」と話していた。

透き通った水面に魚が遊び、水辺が人々の憩いの場となる。時の流れとともに消えていった江戸情緒が戻ってくるのは、遠い未来のことではないかもしれない。